

小久保はあらためて部屋を見渡した。これから嫌でも生活しなければならない住処はたったひと間しかない狭い部屋。小久保は大学時代の下宿屋を思い出した。当時借りていた部屋はここより狭い四畳半だった。その下宿屋は東大に歩いて行ける距離で、下宿屋から東大に行き来する道沿いには東大生なら誰でも知っているであろう下宿屋の本郷館があった。本郷館は明治時代に建てられた木造3階建の下宿屋で部屋の数は70室を構え、この大きさは当時の下宿屋としては珍しい大きさだった。そのため周囲の地域住民でさえも知らない者がいないほどだった。また木造建物の風貌も明治時代の姿をそのまま残していたため、周囲の建物との外観に違和感を生じていたことがより知名度をあげていたのである。小久保の下宿屋や本郷館など、その頃の下宿屋のほとんどが階段廻りに共同の炊事場や便所、風呂が設けられていた。しかし、小久保はその環境に対して使いづらさを感じたことはあったが、心の満足度は満たされていた。狭い下宿屋の部屋には小久保をはじめ学生達の『生きる』エネルギーが溢れていた。

小久保に提供された部屋はきれいに清掃が行き届き、ベッドはまるで家具屋の展示品のごとくシーツにしわがなく、掛け布団はきれいに畳まれていた。小久保にとってこの整理整頓された部屋が妙に冷たさが漂い、生活感を感じるができなかった。小久保は目を閉じて大きくため息をついた。

小久保は床頭台の上に乗っている16インチの小型テレビに目を向けると声を出さずに悪態をついた。この小さいテレビはなんだ、これをテレビと言えるのか！ 小久保の趣味のひとつに映画鑑賞があった。若い頃は映画館に通っていたが、ビデオやDVDが普及すると、自宅で気に入った映画を観るようになっていた。小久保が定年を迎えたとき、彼がかねてから望んでいたこと、自宅でも映画館のように迫力ある映像で観たいという想いを叶えるため、横幅が約170センチもある大型液晶テレビを購入したのである。それにより、お気に入りの映画を大画面で堪能する至福のひとつときを得ることができた。

小久保は小さなテレビを見続けていると次第に感情が高ぶり始め、ついには声を出して悪態をついた。「こんな小さな画面から画像や音響の迫力を感じることもなんかできるものか！」小久保は力強く車いすを動かしてテレビが乗る床頭台に近づいた。そしてテレビの前に置いてあるテレビのリモコンを勢いよく掴みあげると遠くへ投げ飛ばそうと腕を上げて構えたが、ゆっくりと腕を下ろした。小久保はリモコンをテレビに向けると電源ボタンを押した。やがて小さな画面に映像が映し出された。

「ふん！」小久保は不満感をテレビに向かって吐き出した。その映像は白黒で何かの記録映像のようだった。小久保は映像を見続けるうちに彼の表情がこわばり始めた。白黒で映し出されていたのは東大安田講堂だった。

「機動隊の諸君」テレビから以前聞いたセリフが流れてきた。小久保の身体に緊張が走った。「君たちは直ちにこの東大から退出したまえ」小久保の目はテレビの映像に釘付けになった。白黒の映像にはタオルで顔を覆い隠した男が映り、その男が被っているヘルメットには全共闘の文字が書かれていた。そして次の映像にはジェラルミンの盾を持った機動隊や放水車が映し出された。小久保が観る映像は彼が参加した東大安田講堂事件だった。

それはテレビ局が制作した東大安田講堂事件のドキュメンタリー番組であり、その映像に映る安田講堂に立てこもっている学生達はヘルメットを被り白いタオルで覆面をした姿が映し出されていた。安田講堂に立てこもる学生達は突入してくる機動隊に投石や火炎瓶などで闘っている。小久保は口を真一文字に閉じ、映像を見続けた。映像に映る学生が講堂の上から下にいる機動隊に火炎瓶を投げつけた。火炎瓶が機動隊のそばで叩きつけられ、勢いよく炎が舞い上がった。隊列を作っていた機動隊は炎から逃げるため蜘蛛の子を散らすようにばらばらになって後方に避難する姿が映し出された。なかには火炎ビンの炎が身体に移り、仲間が懸命に消火する動きが映像に映し出されていた。小久保の麻痺でない右手は、無意識に力強く握りこぶしを作っていた。

ここで画面は当時の映像からスタジオに変わり、司会者と思われる男性が語り始めた。激動の1960年代、その時、若者達は何を思い、何をしたのか？

「闘ったのさ」小久保は力強くつぶやいた。

その時、小久保の部屋のドアがノックされ、ドアがゆっくりと開いた。

「失礼します」

小久保はその声に反応せずテレビを見続けていた。

男は介護職員で、昼食の案内をするために訪室したのである。男は部屋に入り、小久保のそばまで近づいた。「小久保さん、そろそろ食事の時間になります。食堂までご案内します」

小久保は黙り続けテレビを見続けている。

「小久保さん」男は顔を近づけた。「あの、そろそろ――」

「聞こえてる」

「では行きましょう」

小久保は男に顔を向けた。そこには丸顔で太った若い男が立っていた。男の着るオリーブグリーンのパロシャツは大樽のような体格のせいで窮屈に感じられた。男は若く、小久保の歳の半分にも満たないように見えた。「君の名前は」

「鈴木といいます。そうだ、初めまして、ですね」鈴木は丸顔に人懐っこい笑顔を見せながら言った。

「行くって、どこに行くんだ」

「食堂です。もうすぐ昼食がきます」笑顔を崩さずに言った。

「ここで食べられないのか」

「え？　ここで」

「ここで」小久保は床を指しながら言った。「俺はこのテレビを観ながら食べる」

「いやあ、それはできません」

小久保は返事をせず、鈴木を見つめていた。鈴木を見つめる表情は硬く、親近感を相手に感じさせるものではなかった。

鈴木は小久保の自分を見つめる冷めた表情に当惑を感じはじめた。

小久保は抑揚のない口調で言った。「なぜだ」

「いや……それは……」鈴木は小久保の眼力により言葉がたどたどしくなってしまった。

「そういう決まりになっているので……」

「おれはテレビを観たいんだ。だからここに食事を運んでくれ」

「いや……食堂に行ってもらわないと――」

「いいか」小久保は鈴木の手を遮った。「俺は好きな時間にテレビを観て、好きな時間に飯を食べる。それが普通の生き方だ。それが自由というものだ。違うかね鈴木君」

鈴木は返事に困り黙ってしまった。

小久保は動揺を隠せないでいる鈴木を見てため息をつきながら思った。こんな若造に言っても仕方ないか。「もう行っていい。俺はテレビを観る」

「でも食事をしてもらわないと――」

「俺が食事をしないと何か困ることでもあるのか」

鈴木は黙りこくってしまった。

「こんな気分じゃ食欲は失せる。いいから行きなさい」

「分かりました」鈴木は弱々しく答えた。鈴木は小久保の言うとおりの部屋を出た。

「鈴木君」部屋から出た鈴木を呼び止めた。

鈴木は振り返り、樽のような体を小久保に向けた。「はい、何でしょうか」

「ドアを閉めて」

「あ、すみません」鈴木は動揺のせいで、引き戸を閉めるのを忘れていた。鈴木は引き戸をゆっくりとスライドさせ閉めはじめた。

「まったく」小久保はそうつぶやくと再びテレビに視線を向けた。

やがて引き戸をロックする音が聞こえたと同時に引き戸が開く音が聞こえた。小久保は引き戸の方へ目を向けると女性の介護職員が近づいて来た。歳は40半ばのように見え、彼女が着ているオリーブグリーンのポロシャツはところどころ色が薄くなり、かなり着続けているように見えた。

「小久保さん」彼女の声には感情が入らず、どこか冷めた感じだった。「すみませんが食堂で食事をしてください」

「俺に食事をしろと言う前に、君と俺は初対面の関係だ。まずは君の名前を俺に言うのが先じゃないのか」

彼女は小久保の言葉に動じることなくしばらく小久保を見続けた。まるで小久保という人物を見定めているかのように。

「初めまして日野です」

「では日野さん、俺はここで食事をする」

「部屋ではできません」

「そうだ、食後にはいつもコーヒーを飲んでいる。食事の際には忘れずにコーヒーも用意してくれ」

「ですから――」

「コーヒーはブラック、砂糖なしで」

「小久保さん、聞いてます？」

小久保は車いすを日野に向けた。「なぜ部屋で食べてはいけないんだ」

「食事は食堂でと決まっています」そう言うと、日野は小久保が座っている車いすの後ろに回り、車イスのハンドルを握った。「さっ、行きますよ。左足を車イスに乗せられますか」

小久保は左足を車いすの足置きの部分であるフットサポートに乗せようとはせず、代わりに車いすのブレーキを掛けた。「俺は部屋でテレビを見ながら食事することを要求する」

「無理です。食堂で食べる決まりですから」日野は車いすのブレーキレバーを掴み、ブレーキをはずそうとした。

小久保は日野のブレーキレバーを掴んでいる手を握った。「なら、その決まりを変えろ。できないのなら飯は食べない」

日野は握られている手を小久保の手から強めに引き離した。「分かりました。食べたくないということですね。では食べなくなったら食堂に来てください」日野は早足に部屋から出て行った。部屋を出る際、引き戸が勢いよくスライドして閉まった。

小久保は閉まった引き戸を見続けながら思った。彼女は自分の思い通りにならない不機嫌さをしっかり相手に伝えるタイプだな。分かりやすい性格だ。

小久保は車いすの向きを変え、再びテレビのドキュメンタリー番組を見始めた。しかし、先ほどからの職員とのやり取りでテレビに集中できずにいた。食事は食堂以外食べれない。恐らく他にも決まりだらけなんだろう……。これじゃきっとコーヒーだって好きな時に飲めないはずだ。もしかしてアルコールもきっと駄目だろう。何てこった！ 小久保は無性にビールが飲みたくなってきた。

しばらくすると再び部屋の引き戸を開ける音が聞こえた。小久保が引き戸に目を向けると娘の明子がいた。明子の後ろには女性の姿が見えた。その女性は小久保が施設に着いたとき、出迎えてくれた女性で、主任相談員の長谷川と自己紹介していた。

「お父さん！」明子が半ば怒鳴るように言い、二人が近づいてきた。

「ノックくらいしろ」小久保はテレビに目を戻して言った。

「もうっ何してるの！ 食事が用意されているのよ。早く食堂に行ってよ！」

「何度言わせるんだ。俺はテレビを見ながら食事をする。そして食後にはコーヒー。当然砂糖無しのブラック。このセリフを一体あと何人に言えばいいんだ」

「もう、わがままは言わないでよ」

小久保は明子を指しながら言った。「何がわがままなんだ、お前やこの施設は俺の意思を尊重しないのか」

「小久保さん」明子のそばにいた相談員の長谷川が小久保の前でしゃがみ込み、自分の目線を小久保の目線の高さに合わせた。長谷川の茶色に染めた長い髪は、後れ毛が少ない一つ結びで、乱れもなく清潔感を感じさせている。「先ほどお会いした相談員の長谷川です」

「ああ、覚えている」

「小久保さん、施設での生活は集団の生活が基本となっています。ここすずらんに入所さ

れたご利用者様は施設のタイムスケジュールに沿って生活されています。集団生活では決まった時間で過ごすことが必要になります。別に小久保さんの意向を尊重しないわけじゃありませんが、食事や入浴などを皆様お一人おひとりの自由な時間に提供してしまいますと、ご利用者様の介護をしている職員の対応が困難になってしまいます。その点をご理解していただければと」

小久保はしばらく長谷川を見つめたあとに言った。「簡単に言えば、ここの規則に従え、だろ」

「まあ、確かに……」

「ここの施設が決めたスケジュールで行動しろ。学校の時間割のように」

「お父さん！」明子が口を挟んだ。「いい加減職員さんを困らせないでよ。それにここの規則を了承して契約したんだから」

小久保が長谷川を見た。彼女は穏やかな表情を浮かべながら頷いた。

「だから」明子が言った。「長谷川さんや他の職員さんたちの言うとおりにして。困らせるようなことは言わないでよ子供じゃないんだから。わがまま言わずここの決まりを守ってね」諭すような口調で言った。

「規則を了承して契約したのは明子、お前だ。俺じゃない。俺はお前が勝手に契約した後で話を聞かされたんだぞ。むりやり納得させられたんだ」

「もう、だからあ——」

小久保は右手を挙げ、明子の言葉を遮った。そして、長谷川に顔を向けた。「今の俺に選択する余地はないわけか」

長谷川が首をゆっくりと横に振った。「意見や希望をおっしゃってください。私たちはご利用者様の意向を受け止めて検討させていただきます」

「但し全てじゃない」

長谷川はうなずいた。「おっしゃるとおりです。しかし可能な限り希望に添えるよう努力します」

「どのように努力するのかね」

「業務改善委員会という委員会がありまして、ご利用者様が安心して過ごせる環境、過ごしやすい環境の向上を検討します。ご利用者様の意見もここで検討いたします」

小久保は何も言わず、視線を長谷川の目から離さずゆっくり小さく何度もうなずいた。

「さっ、分かったでしょ」明子がここのやり取りを終わりにするかのよう言った。「お父

さん、言われたとおりに食堂に行つて」そう言うと視線を長谷川に向けた。「すみません、お忙しいなか時間を割いていただいて。父も納得したようです」

「いえ」長谷川は笑みを浮かべながら明子に言った。長谷川は小久保が納得したとは思えなかった。小久保の何も言い返さず、黙つてうなづくだけの態度に一抹の不安を感じていた。小久保の強いまなざしは何かを自分に伝えているようだった。

小久保は部屋を出て食堂に向かった。隣には相談員の長谷川と一緒に歩いていた。娘の明子は仕事に行くため、施設を後にしていた。しばらく進むと広いホールが小久保の視界に入ってきた。そこには四人掛けテーブルが複数置かれ、利用者が昼食を食べていた。

「ここが食堂です」長谷川が言った

小久保は食堂を見渡した。食堂には四人掛けのテーブルが並び、各テーブルの間隔は余裕をもって配置され窮屈さは感じられなかった。そしてテーブルについている利用者達は黙つて食事が来るのを待っていた。食堂の奥には大型テレビが配置され、昼のワイドショー番組が映されていた。テレビからは番組の観覧者の笑い声が食堂に響き渡った。しかし利用者の誰一人興味を示す者はいなかった。

小久保は大きくため息をつきながら思った。これが老人ホームなのか。老人ホームの名前は若い頃から聞いたことはあったが、まったく興味はなく自分には縁のない場所と思つていた。しかし今はどうだ、老人ホームの食堂にいる。俺が興味を持たなかったと同様におそらく世間の者だって興味を持っていないだろう。まるで世間から見放された者が行き着く場所だ。

小久保は右手を力強く握りしめた。くそっ、絶対にこんな姨捨山のような場所から抜け出してやる！

「小久保さんの場所はどこかしら」長谷川が食堂を見渡しながらか言った。

食事介助をしていた男性職員が長谷川と小久保に気づき、介助の手を止めると利用者の場所から離れ二人のそばに近づいてきた。「お疲れ様です」男性職員は長谷川に言うと、小久保に顔を向けた。「こんにちは」

小久保は黙つてうなずいた。

「小久保さんです」長谷川が言った。

「ああ、今日入所された小久保さんですね」そう言うと職員は再び小久保に顔を向けた。「はじめまして、塚本と言います。よろしくお願ひします」ハキハキとした声で言った後ゆっくりとお辞儀をした。

小久保は黙ってうなずいた。歳は30代くらいか、小久保は思った。落ち着きがあり穏やかな表情、きっと中堅どころの職員だろう。

「小久保さんの席はどこ」長谷川が言った。

「席ですね。あちらです」塚本はテーブルの一つを指した。そのテーブルには3人の男性利用者が昼食を摂っていた。

「では小久保さん、私はここで失礼します。昼食をどうぞ」長谷川は小久保に一礼して小久保のそばから離れて行った。

「小久保さん、車いすを押しますね」塚本が言った。

「自分で行ける」小久保はテーブル見ながら言った。

「失礼しました」塚本は車いすから一歩退いて言った。

小久保は車いすを進め、テーブルに近づいた。小久保がテーブルに着くと、テーブルの3人が小久保に視線を向けたが、すぐに視線を戻した。

「皆さん」塚本が男達に言った。「今日からここで皆さんと一緒に過ごす小久保さんです。よろしくをお願いします」塚本は小久保に顔を向けた。「食事をお持ちしますね」塚本は食事を取りに行った。

小久保の隣にいた男が笑みを浮かべながら言った。「こんにちは」

「どうも」

「よお」小久保から見てテーブルのはす向かいに座っている男が言った。「織田だ」織田は笑みを浮かべながら言った。五分刈りの髪からはところどころに白髪が見えていた。織田は小久保より体が一回り小さく、右手でプラスチックのコップを掴みお茶を一口飲んだ。左腕は麻痺のため小久保の麻痺した腕同様に肘が曲がっていた。織田はコップを置くと言った。「部屋は何号室だい」

「確か……205号室」

「205かあ」織田は205号室の場所を思い出そうとしたが、思い出せなかった。「あれ、どこだっけ」

「角の個室だ」小久保の正面にいる男が不愛想な表情で視線を合わせることなく静かに言った。「そこは倉田さんの部屋だ。いや、部屋だった」

織田はその言葉を聞くと、目を見開いて言った。「そうか。みろ、やっぱりだ」織田は男に体を近づけた。「きっと亡くなったんだ。本当にここの職員は何も教えてくれやしない」織田が吐き出すように言った。

織田は小久保に視線を向け、話し続けた。「あんたが使う部屋には倉田さんがいたんだ。倉田さんは数日前に具合が悪くなり救急車で病院に運ばれたんだよ。職員に倉田さんの具合を聞いても詳しくは分からないと言って話はそこで終わり。今日の朝に聞いても同じ答えだ」

織田は小久保を指した。「あんたが今日来たってことは、職員は倉田さんがもうここに戻らないのを分かっていたから、あんたをその部屋に呼んだわけだ。くそっ！ 何が分からないだ」

「きっとここの規則で言えないんだよ」穏やかな声が小久保に聞こえてきた。その声は小久保の隣の男からだった。

小久保はその男を見つめた。年齢は自分と同じくらいいかいくぶん若いよう見える。車いすに座っているということは、きっと俺と同じように足に障害があるのだろう。顔には縁なしの丸眼鏡をかけ、薄くなった髪はオールバックで整えている。眼鏡のレンズは厚くもなく、野暮ったさは感じられない。丸眼鏡を通して見える男の目は、優しいまなざしで織田を見つめている。

丸眼鏡の男は織田に対して穏やかな口調で言った。「言いたくないわけじゃなく、個人情報とやらで言えないんだよ。別に意地悪で言わないわけじゃー」

「いや」織田が言った。「単に気にしていないだけだ。俺たちの気持ちなんてどうでもいいと思っているのさ」織田の語気が次第に強くなってきた。「倉田さんとはここで一年以上の付き合いがあった。ただの顔見知りとは違う。いわば仲間みたいなものだったんだ。仲間を心配するのは当然だろ！」織田は他のテーブルで食事介助をしている職員に目を向けた。「でもここの職員はな！」織田は声高に言った。「俺たちの思いなんかに気遣いもしない。個人情報とか知らんが、俺たちが聞いて何かまずいことでもあるのか！ 俺たちは仲間だぞ！ 俺達を何だと思っているんだ！」

小久保は食堂にいる職員に目を向けた。その職員はチラリと織田を見たが、すぐに視線を戻し昼食準備を続けた。聞こえないフリか、小久保は思った。

「まあまあ」丸眼鏡の男が織田をなだめるように言った。「職員も規則に従わなければならないから仕方ないよ」

「ふんっ、何が規則だ」織田は吐き出すように言った。そして織田は小久保に顔を向けた。「なあ小久保さんよ、ここの生活がいかにクソ面白くない所だとすぐに分かるぜ」

「やれやれ」丸眼鏡の男は首を横に振った。「でも確かに」そう言うと小久保に顔を向け

た。「否定はできないかも。小久保さんがどう感じるかが楽しみです」

小久保はなにも言わず、丸眼鏡の男を見つめていた。